

スポーツと芸術を通じた教職員の交流

鷲野谷秀夫 人間総合科学等支援室体芸支援室技術専門職員
(さぎのや ひでお／芸術)

筑波大学は、同じ学内の職員といっても病院や体育、芸術など職種はさまざまであり、教育という目的は同じでも、仕事の内容は大きく異なっている。異なる職種の人と交流することは、自分の仕事にもいい刺激になる事はもちろん、現代の社会を理解するうえで、たいへん重要と感じる。しかし、学内の交流の場は少なく、他の職種の人と接する機会は、あまりないと思う。通常の勤務は、同じ作業の繰り返しが多く、マンネリになるため、新しい情報を得て刺激を受け、気分転換をすることが、仕事を向上させ人生を豊かにすると思っている。

テニス

私は、テニスを始め25年ほどになる。最初は単なる暇つぶしで始まったテニスも、今では大きな楽しみであり、学内の人との交流の場でもある。スポーツをすることは、精神的にもたいへん気分転換になり、運動不足になりがちな現代の生活では、たいへん優れている。しかし、今までを考えてみ

ると、大会などの成績より、学内や学外のテニス愛好家との交流である。通常では情報の入らない、他の学系やセンターの様子がわかり、自分の仕事で困ったときでも、気軽に相談し、協力してもらったこともあった。スポーツの繋がりでは、年齢や立場に関係なく、このような仕事の悩みなどを気軽に話せる環境にあると思う。

沖縄の海

現在、写真の世界に進んでいるが、いつでもカメラを持ってなんでも撮影してきたわけではない。やはり、好きで興味のある被写体でなければ、写真を撮る気にならない。その撮影意欲を掻き立ててくれたのが沖縄の海である。私は、小さいころから魚が好きで、飼育し鑑賞することが好きである。初めて行った与論島で、貴重な経験をした。簡単な足ひれと水中めがねをつけただけのシュノーケリングで、今まで飼っていた魚たちが目の前に現れたときの感動は今でも記憶に残っている。写真は、撮影意

欲が最も重要で、その写真を撮りたいという撮影意欲が強ければ強いほどいい写真が撮れる。それからは、毎年のように沖縄に行っている。しかし、沖縄の海といっても、場所によってまったく違っていた。沖縄本島の海は、珊瑚が荒れて魚も少なかったが、琉球列島の島々の海は、たいへん美しく、海水はどこまでも澄み、珊瑚礁も鮮やかで、魚もたくさんいた。このような海では、一日中泳いでいても飽きず、泳ぎが得意でもない私でも、まったく恐怖心がなく写真を撮ることができた。

陶芸

陶芸は、私にとって仕事である写真と同様に、生活に大きく影響を与えた。陶芸の窯を築くため、アトリエに向いた土地を探し、そこに家とアトリエを作り、そこに住み着いたからである。仕事から帰ると、毎日作陶をし、休みの日は窯に火を入れる日が続いた。そのころ、笠間と益子によく通い、陶芸展も数多く行った。そのため、陶芸家の友達もたくさんできた。陶芸は、自分のイメージをアトリエ内で制作できるため、写真とは違った分野でもある。

不可視光撮影

私の好きな写真の分野は、紫外線や赤外線といった肉眼では見えない光で撮影し

た特殊撮影である。もともと風景撮影やスナップ撮影には、あまり興味が無く、顕微鏡写真や天体撮影から、写真を撮り始めたからである。不可視光による撮影は、肉眼では観察し得ない、特異な風景を見ることがができる。例えば、蝶は、紫外線を見ているといわれている。肉眼で同じ白く見えるモンシロチョウを紫外線で撮影すると、雄は黒、雌は白で表現される。特殊撮影は、このような不思議な現象を撮影することができる。私は、以前に、癌組織が紫外線を当てると赤く光ることを舌癌で発見した。それから、病院で癌の蛍光撮影について、研究してきた。このように、特殊撮影は、いまだ未開拓の分野で、たいへん夢のある世界である。

最後に

多くのものを制作すると、いつかはスランプに陥る。その時、違う分野に熱中すると、そのスランプから比較的早く立ち直ることができて、いい相乗効果があることに気がついた。大学は、他分野の優れた情報を得るには、最も優れた職場だと思う。今後も、教職員同士の交流を大切にしたいと思っている。